

# 第1回 島めぐり

## 「鶴見町大島」

高 司 良 恵

(会員 佐伯市宇山区)

### (1) 探訪日程

①実施日…平成十四年八月二日(金) 二十六名参加

②行 程…町営定期船「おおしま」 十時発

佐伯港—大島地下 十時三十分下船

地下地区見学—井戸—寺子屋跡—加茂神社—アコウ林

—旧道を歩く—田ノ浦着—天満社—小学校にて昼食

冷房完備の教室にて「大島今昔」講話—船隠—金毘羅

宮—折り返し—田ノ浦—十五時三十分乗船—佐伯港葛

港十六時着解散

③資料プリント…「大島探索」及び案内 真柴茂彦氏

「大島の歴史を語る」故神崎辰雄氏のプリント コ

ピー 佐伯史談会

④協力いただいた方…鶴見町役場・大島小学校・町会議員 土師辰英氏・地元田ノ浦 田中静一氏(講話)・区長 浜田光晴氏

### (2) 大島の概要

厳しい集落の立地環境大島は、佐伯湾口の南側に浮かぶ面積一・七八平方<sup>キロ</sup>メートル 周囲十一・七五<sup>キロ</sup>メートルの小島で、集落は船隠・田ノ浦・地下の小集落が分散立地している。

大島全域が急傾斜地危険区域の指定を受けており、密集した家屋のすぐ近くまで山地が迫っており、台風・大雨・梅雨時期では、崖崩れ等の災害の発生する危険があり立地環境は厳しいものがある。

大島の神崎家の「大島開祖神崎過去帳」によると、先祖が主の桑名城 滝川一益が、秀吉に敗れたため天正十一年(一五八三)、豊後国神崎に下り保戸島を経て来島したと伝えられ、又、佐伯藩主から庄屋として島の開発につくし、島民は魚と鮑を納め藩の水夫役を勤めるよう義務づけられていた。おそらく大島の開発は、江戸初期ではないかと考えられている。

〈大島の行政上の推移〉

・明治二十二年（一八八九）町村制施行により南海部郡

東中浦村に編入

・昭和三十年（一九五五）町村合併により鶴見町大字大

島となり現在に及んでいる。

### (3) 大島探訪の記

好天に恵まれ真つ平らの佐伯湾を定期船「おおしま」は、エンジンの音も軽やかに海上五里の向こうに浮かぶ「大島」を目ざして進む。大入島・八島・竹が島・大小の島々、リアス式海岸に沿って点在する浦々が、すつぱりと夏霧に包まれかすんで見える。山々の稜線が美しく弧を描き最東端の梶寄浦の海に、なだれ込んでいる。いつに変わらぬ美しい豊後水道の風景に、ふと年月の流れを感じる。戦時下の佐伯湾・航空隊・防備隊：空襲と一入の思いに耽っていると、「地下」到着。わずか三十分間で着いた。

※ 定期船「おおしま」について

平成十年十月一日より鶴見町が、有限会社「豊島」から引き継ぎ公的な運営をするようになった。「おおしま」

は、二十二トン、定員四十六人乗りの快速船である。

下船後「地下」の浜で開会式を行い日程の説明、参加者の多くの方が「大島」は初めてであった。

真柴先生のガイドにより、まず古井戸を見学した。現在その井戸は使用されていないが、蓋をして保存されていた。洗い場もあり島民の貴重な生活用水として、朝夕はさぞにぎわったであろうと思いを馳せた。

そこから遙か山上に「御番所山」と呼ばれる山を仰ぎ見たが、草木が生い茂り道もなく現地まで登ることは出来ないとのことであった。この「御番所山」は、毛利藩高慶公の頃湾内に入る船舶を監視して、上浦・中浦・下浦の漁労を糺し、湾内九十九浦の総取締所として極めて重要であった。「佐伯の殿様浦でもつ」といわれ、



加茂神社の手前にある  
大島寺子屋跡（地下）

今日に至っている。

細い浦道を一列になって、加茂神社に向かう。途中「大島塾」跡の標があった。佐伯の毛利藩では当時寺子屋は少なく、城下二・木立一・大島一・羽出浦一の五寺子屋があった。大島では医師「市瀬春宗」が教えていたといわれ、寺子十六名という記録がある。

息をはずませ加茂神社へ行く。崖に立つお社は、昔の城を思わせるような武者返しにも似たそりのある石垣で囲み、とても立派なものであった。これは切畑村(弥生町)出身の名工の積んだものだといわれている。境内右側には御神木の「アコウ」の大樹の枝々が堂々と空高く広がっていた。

※ 島民の信仰厚き加茂神社樹齡三百年のアコウの偉容  
加茂神社は、滝川一益の侍大将であった望月信房は、柴田勝家に敗れ九州に下向、京都下加茂神社の分霊を勧請し、豊後の国「神崎村」に落ち着き没した。その子二男の内蔵丞一信厚が天正十一年(一六〇六)に大島に渡り、島の守護神として祭ったといわれている。

・祭神…玉依比売命・加茂建角身命

・鳥居…文化四年三月吉日

・明治三年三月、加茂大明神・巖島大明神・猿田彦大神の三神を合祀した。

・本殿右側に正一位稻荷大明神、左山側に生目様を祭っている。

加茂神社を出て旧道に沿ってアコウ林が続く。枝々から気根が下がり林の地表に根付き、さながら熱帯の森の中にいる様な景観に驚く。大分県天然記念物に指定されている。

アコウ林崖抱きしめて夏の島

しばらく山道を歩き「田ノ浦」の天満社に着く。右側に梅の木があり境内に入る。梅は菅原道真公が愛好し天満宮の神紋になったと伝えられている。

毛利藩の家臣 緒方又兵衛は敬神の心が厚く、筑前の



加茂神社の御神木「アコウ」の大樹

国太宰府に赴き天満宮の御分霊を勧請して、宝暦元年（一七五二）六月二十五日この地区の守護神として神社を創建したといわれる。

・祭神…菅原道真

・鳥居…昭和三年三月吉日

土師辰英氏のお世話により、小学校の冷房完備の教室で昼食。休憩をして島の有識者「田中静一氏」より四十分間にわたり大島の漁業を柱に今昔話をしていただいた。田中さんは八十三才、巾広い体験談が次から次へと方言も交えユーモアたっぷり心にしみ入るお話をして下さった。時間がたつのもわからない程 魅力的・感動的なお話であった。

海の郷土大島をこよなく生き甲斐として愛し漁業に専念、高率的な漁法を体験の中から研究実行し成果をあげた話は印象深く心に残った。

真昼の暑いさ中、島の裏側にある「船隠」の金毘羅宮へ行く。トンネルを出て村に入るとすぐ右手の山裾にある。村は漁業一筋に生活を送っていたので、航海守

護・開運の神として御分霊を受け祭ることになったといわれている。

・祭神…大物主神・崇徳上皇

・鳥居…明神鳥居 明治四十三年（一九一〇）一月建立

お社は小さく交代

してお参りをした。

お社を背景にして記念撮影をした。

計画した見学コー

スも順調に終わり、

出航まで各自自由行

動。海の大島を堪能

した。



「船隠」の金毘羅宮を背景に記念撮影

※ 大島の海浜植物について

アコウ木・ノアサガオ・シオミイカリソウ・ハマホラシノブ・ルリハコベ；等。ノアサガオが崖をおおい紫の花を咲かせ、すごい力で繁殖していた。

大島は山頂まで段々畑で作物を作っていたが、相当厳

しい労働であったと思う。幾星霜、段々畑も石垣が少し残って夏草木が茂り荒れ果て潮風に鳴っている。

石垣の定かに残る段畑

荒るるに任せ雑木茂れり

午後三時半、再び「おおしま」に乗船。「田ノ浦港」から一途佐伯葛港に四時無事帰着した。

(4) おわりに

津久見史談会々長 酒井様御夫妻・常木祐一様・清家タカエ様・会員皆様方の御協力に感謝申し上げます。

【資料】

・鶴見町誌

・真柴先生(大島探索)

・故神崎辰雄氏(大島の歴史を語る)

## 川名のルーツ

◆中川 中江川と同じように分流であるが、こちらは佐伯

市街地を通っている。そういう意味での名。

◆中江川 番匠川の河口部にある分流。もう一つの分流が中川で、中江川は中川と本流の間にある。名の通り中の江である。

◆横川 江戸時代は久留須全体をこう呼んだが、いまは支流の旧横川村を流れる部分だけの名。本流に対して横から入ってくるからか。しかし、昔はこちらが本流と見られていた。

◆上津川 上にも津にも意味はなく、石ころの多い川であるコウズ、ゴウツの当て字である。この谷にも人が入り、同名の集落がある。

◆大越川 吹原峠に通ずる道が川沿いに通るので、峠越えに関連か。大越の集落は中流部にあり、下流で往還が川越えするので、あるいは川越えが起源で集落名はその後に生まれたか。

◆木立川 流域のかなり広い範囲を木立という。起源はわからない。文字通り木立のある場所ととってよいかどうか。北地ではないだろう。(『日本全河川ルーツ大辞典』)